

## 東シナ海における氷期の環境

## Marine environments in the East China Sea during the glacials

# 川幡 穂高 [1]

# hodaka kawahata[1]

[1] 東京大学大学院新領域創成科学研究科

[1] GFS and ORI, U of Tokyo

ピストンコア (MD982195) は、IMAGES の 1998 年実施された航海でフランスの調査船 Marion Dufresne によって九州西方沖の水深 746m の地点 (31 °38.33N, 128 °56.63E) から採取された。コアトップのアルケノン水温は 24 で、この温度はコア採取地点周辺海域での年間平均水温に近かった。一方、最終氷期最盛期 (LGM: Last Glacial Maximum) の水温は、現代より約 5 低いものとなっていた。アルケノン水温は、D-O サイクルに呼応した d18O 値の負の方向のピークと必ずしも対応していなかった。アルケノン水温を基に、温度の効果のみで変化する表層水の酸素同位体比の変化量を推定して、LGM 期間の平均と D-O サイクルの温暖ピークの時期について *G. ruber* の計算値と実測 d18O 値と比べると、実測値は約 1 ‰減少していた。一次生産は、19.5 ka と 18 ka あたりの小さい極大期を除くと、24-15 ka には一定で、15-14 ka で増加した。この時期は、*G. quinqueloba* なども産出しており、海水準の低下に伴う海岸線の海への大規模な移動に伴って揚子江や黄河の河口が大きく移動し、コア採取地点にも低塩分化の影響がでたものと推定される。陸棚の情報については、17-14 ka のゾーン MD2195-3 (草本花粉-コナラ属コナラ亜属) では、草本花粉が優勢で、特にヨモギ属やカヤツリグサ科などで特徴づけられた。また、ゾーン MD2195-3 では、コナラ属コナラ亜属の出現が比較的高かった。しかしながら、興味ある事実としては、エダハマキ属は現在日本列島には産しないが、本コアでは、ゾーン MD2195-2c, 3, -4 には出現する。この産地は、南方のニューギニア、インドネシア多島海、フィリピンなどである。この花粉がコア MD2195 に氷期に観察されるという事実は、黒潮が氷期であっても流入していたということを示している。LGM には、COHMAP (1988) によって復元された偏西風の位置は、北緯 30 度あたりに南下していたとされている。このことは、中国の東部では、現在より乾燥していた可能性が高いことを示している。